機動戦士ガンダム00～Rightning Star～

SimoLy

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは、『来るべき対話』が訪れない世界。

そんな世界で、少年は一つの願いを追い求め続ける。

これは、そんな少年ととある心を持った――――の物語。

この世界は言わば『来るべき対話が来なかった世界』とでも表現しておこうか。世界の変遷はＣ．Ｅを軸にしている。

勿論別世界線に出てくる者が出てこないわけではない。だが限りなく確率は低いだろうと思われる。なんて言ったってそれは『彼らの物語』で、『僕の物語』ではないわけだからね。

さて、話を次に進めよう。この世界を読者諸兄に分かるように簡単に表すなら、『ＳＥＥＤの世界で、００の機体（設定）が出てくる』物語だ。キャストは総入れ替え、二次創作とは何だったのか。

それに機体も出てくるのはほんの僅か。『設定を借りたオリジナル作品』とも言えるかもしれない。

そんな作品でも良い、という者だけ、作品を閲覧していただけると助かる。

目　次

st.0 プロローグ ―― 1
st.1 役目 ―― 5
st.2 設計 ―― 12
st.3 要請 ―― 20

ｓｔ．０　プロローグ

ピピピッ・・・　と、機械的な通知音がコクピット内に響く。俺は寝起きの頭が思考を拒否するの感じながらも、通知音の元であるメッセージボックスを開く。

「これより一時間後、機体名称〝紅蓮〟
率いる一個小隊と接触の可能性あり。クルーは直ちにブリーフィングルームに集合せよ。
ーーーシロもね。
フィリス」

何かする前に釘を刺される・・・　というのはそこそこ心にくるものがある。

俺ことシロ＝リグニント（Ｓｉｒｏ＝Ｒｉｇｎｉｎｔ）は、この艦のクルーの一人で、一応メインパイロット・・・　だと信じてる。だから〝クルーの一員〟という認識は持ってるんだけど・・・　この前不慮の事故で参加しなかったのを相当根に持ってるらしい。

俺はそのメッセージに対して「了解」とだけ送り、コクピットハッチを開けて、ブリーフィングルームに向かった。

接触するか分からない相手のブリーフィングを終え、俺は再度愛機のコクピットに戻ってきた。今回は仮に居た場合を想定して、先にＭＳ部隊・・・　俺しか居ないから単機偵察だな、を行うらしい。大抵そこで敵の〝紅蓮〟とかち合って、戦闘になるのがいつもの流れだ。

・・・　戦績は、全戦全勝。だからこそ次は負けるのではないかとの危惧が予想されている。

その最たる理由は、相手の開発速度の速さだろうか。なにせ二十四時間見なかっただけで新兵装を積んで帰ってくるからな。勿論、こちらも新兵装を開発すれば良いんだが・・・　とある事情があってそれも

出来ない。
俺の機体は開発コード『ＧＮ―０００００／７Ｓ』通称、『ダブルオーガンダムセブンソード』と呼称されている。
それの何が問題か、それは『ガンダムタイプ』は総じてオーバーテクノロジーで開発されている。
現存する機体は我らが連合軍特別兵器開発局（通称：ＲＳ）が保持するこの機体だけだ。
ＧＮ粒子と呼ばれる物質を放出するドライヴ、太陽炉が最たるテクノロジーで、両軍とも〝模造品〟の開発には成功しているが、本物に至ることは無かったし、これからも無いんだろうと思う。
少し話が逸れたか。まぁつまりはこちら側が進化する事は無いと言う事だ。標準搭載の兵装に新兵装が性能面で追いつけないからな。だから俺が、操縦技術の面で成長するしかないって事だ。
・・・さて、そろそろ作戦開始時刻か。
俺は慣れた手つきで『セブンソード』を起動する。
面倒くさいプロセスは全て機体側及びブリッジに任せてるから、俺に分かるのはシステムオールグリーン、つまりは特に異常なく発進準備が完了したという事だけだ。
「ーーーシロ、準備はいい？」
これも聞き慣れた声、オペレーター・・・フィリスの声に答える。
「ああ、いつでもいい」
「そっか。発進タイミングは任せるよ。今回も、しっかり帰ってきてね」
これは戦争で、戦争では人はあっさり死ぬ。それを分かっていてフィリスはそう言うのだから、困ったものだ。
「勿論。
シロ―リグニント、『セブンソード』、出るッ！」
そんな彼女に、「勿論」と答える。
ここまでが、いつもの光景だ。

戦闘宙域に着いた俺は、スラスターの出力を一定に保ちながら、索敵を開始する。
この宙域はスペースデブリが散乱（？）しており、辺りを見通す事は愚か、デブリを躱して飛ぶ事すら難しく感じる。そこはまぁ機体性能に助けられつつも、俺はようやく目的のモノを見つける。
そこにあったのは一片のスペースデブリ。目的はそのデブリの中心・・・ちょっとした流星物質、採取された希少資源だ。どうやらここら一体のデブリは資源衛星の亡骸だったらしく、所々に資源となる物質が埋め込まれているらしい。ＲＳも資源を目的にここまで来た訳だからーーー相手も同様だろう。
索敵に引っかかった敵影を横目で確認し、多少の安堵と共にその場所へ向かう。
来てくれると思っていたよ、『紅蓮』！

「今回もやはり居たか・・・ガンダム・・・！」
宙域中に広がるジャミングに侵されたレーダーを眺めて、その少年は笑みを浮かべる。
太陽炉搭載機は発する粒子のジャミング能力によって位置が把握できないが、広過ぎる効果範囲によって〝その宙域に居る〟事はわかる。そして、そういったときに必ずこちらに飛んでくるのが・・・ガンダムタイプのパイロットだ。

予想通りの機体が宙域中央で佇んでいるのを確認し、俺はそれの前に姿を現わす。
『今回も引くつもりはないのか？』
まるでネットゲームのチャットのような感覚で相手にコンタクトを取るのも、いつもと同じだ。
『・・・それについてだが、うちの指揮官から伝言を預かっている。』
そのメッセージに添付されている一つのファイルを確認し、無いとは思うがウィルス確認を通して艦に再送する。俺も中身を確認する

が…

『非殺条約…　こんなものがまかり通ると？』

『貴方々については調べさせてもらった。勿論情報レベルによって規制はされていたが、それでも軍人ではない…　違うか？』

そのメッセージに、俺のキーボードを叩く指は止まる。

相手の言う通り、こちらは全員が全員軍人ではない。むしろ民間人の出が多い程だと思う。

返信を返せないまま、少しの時間が経ったところで聞き慣れた通知音がコクピット内に響く。

「その条約、ありがたく結ばせてもらおう」

今度のメッセージは戦闘宙域外…　つまりは俺の母艦から届いたもので、艦長直々に送ってきたものだった。

『どうやら締結するらしい』

『そうか。その決断に感謝し、今日の所は引かせてもらう。

この宙域の資源もお礼だ。』

そのメッセージを受信すると同時、『紅蓮』と名が振られた真紅の機体は背中を向け、俺の機体から離れていく。

『――ありがとう』

何故だかは分からないが、相手がそう言ったように聞こえたのは、きっと幻だったのだろう。

通称、『非殺条約』が俺達とあいつらの間で結ばれてから、一年の月日が経った。

――ここから、その物語は動き出す。

ｓｔ．１　役目

「――通称『Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ』。プラントが立ち上げた軍事組織は依然我々に攻撃を続けており、その被害は増え続けています。
連合軍では軍備の強化を図ると同時に――」
はいはいお疲れお疲れ。
いつまで経っても同じことしか報道しないキャスターに嫌気が刺した俺は、思わずモニターの電源を切った。
ならさっさと軍備の強化してくれませんかね、こっちは一年前の機体で頑張ってるんですよ???
「あああああああ!?またあいつらはさせる為の資源すら寄越さずに無理難題を押し付けやがってんのかぁ!?」
・・・・軍備の強化、図ってたみたいです。
艦内に響き渡るその怒声の発生源はブリッジだろうか、いやブリッジでしょうね。というか今俺自室に居るんだけど、ブリッジからは結構離れてると思うんだけどなぁ・・・・？
『シロ、今大丈夫か？』
突如届いた携帯端末のメッセージに目を通し、俺は簡単に返す。
『大丈夫です。話はドックに行ってから聞きます。』
簡単に自室の具合を確認・・・・といっても、そこまで散らかせるほど物があるわけでもないので、特に問題なし。俺自身も先ほどまで出撃していたので問題ないだろう。
先ほどの怒声を努めて無かったことにしつつも、俺は若干急ぎ足でドックに向かった。

連合軍特別兵器開発局、通称：ＲＳの担当は文字通り兵器開発。地球連合軍ｖｓプラント…『Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ』（ザフト）だったか、の利権を巡った戦争は激化する一方で、俺たちが参戦してからでさえ既に一年が経過した。『科学を成長させるのは戦争』と誰かが言ったらしいが、全くもってその通りだと思う。
両軍の技術は成長を続け、一年前ではオーバーテクノロジーであっ

た『太陽炉』の類似品でさえも現在では大量生産、実戦投入されている程だ。
そして、それらを搭載したＭＳでさえも量産され、現在では両軍共に太陽炉搭載機で戦闘を行っている。
だから――――
「お前さぁ、もうちょっと丁寧に扱えねえの？」
苦笑を零しながらそう言うのは、この艦のメカニック・・・ ラント＿スリジア（Ｌａｎｔ＿Ｓｒｉｚｉａ）だ。
「むしろあの量相手にこんだけの被害で収まってるの褒めて欲しいんですけど？」
俺は自身の機体・・・ 〝大量に傷が付いた〟『セブンソード』を横目で見て答える。
「・・・ そうだな、そうなんだけどさっ」
彼は納得した様子でリフトに登っていく。きっと今回も、しっかり直してくれるのだろう。
――――俺があんなことを言ったのには、理由がある。
ＭＳ開発において、各軍は（明言はされていないが）それぞれ『世代・Ｓｔａｇｅ』で組み分けしている。一定以上の性能を叩き出した機体は、次の世代へ・・・ といった感じだ。
この機体・・・『セブンソード』は第三世代。一年前に突如発見された機体だ。
当時最新モデルだった第三世代だが、今の量産機は第三世代・・・は愚か、第四世代である。世代間の性能差は圧倒的で、一般的なパイロットが搭乗していれば次世代機一機で過去世代の機体の大群さえも撃破できる・・・ と言われている。
つまりはそういうことだ。
「あ、そういえばシロ！」
高所作業用のリフトによって俺を見下ろす形になったラントは、思い出したよう俺に呼びかける。
「『新作』、どうだった？」
呼びかけた彼は、こちらを見ることもなく質問する。その視線の先

は、なおもまだ修復されきっていないセブンソードに向けられており、その手にはリペアツールが握られている。だがその声色には期待が混じっており、きっと〝今回こそは〟と気合入れて作ったものだったのだろう。
「コンバットレコーダ見れば分かりますが、安定して超長距離を狙う事が出来ませんでした。長距離までならなんとかなるけど、それだったら普通のライフルで良いってなりますね。」

彼が『新作』と口にする場合、ＭＳ用の新兵装であることが多い。今回もその例に漏れず、新兵装だったのだが・・・・。
『ＧＮバスターライフル』・・・ 今回の兵装の名前。長距離以遠での高威力粒子ビーム砲を実装しようとの試みだったが、安定化出来ていなかったが故に粒子が拡散、超長距離圏まで届かなかった。
「安定化出来なかった・・・ ？そんなはずは・・・ いやでも」
手、止まってますよー？と言いたくなったが、俺も少し気になる事が出来たので自身の端末を立ち上げる。そのままセブンソードのコクピット内のシステムに接続し、先ほどの戦闘を振り返る。
先ほどの戦闘は、何か目的があっての戦闘ではなく、〝紅蓮〟の部隊との戦闘でもない。ただ俺達を見つけた小隊との戦闘で、十五機程の量産機との戦闘だった。勿論こんな風に振り返れる時点で結果はこちらの勝利。バスターライフルは最後の締めとして使用したのだが・・・・。
レコーダを進め、問題のシーンまで辿り着く。その時の機体状況のデータも使いながら、何故拡散してしまったのかを調査してみる。
本来であればこういう仕事には適任がいるのだが・・・ 多分今はブリッジで艦長を宥めているだろう。
「何か分かったか？」
上がったままのリフトから身を乗り出し、そのまま俺の高さまで飛び降りてくるラント。その様子を横目で確認しながらも、問題のシーンの機体状況を確認する。
「・・・ 分かんね。」

そもそも専門外である。反動制御や銃身との接続状態等、俺に分かるところに問題は見られない。ましてやドライヴに問題があるとは

「待て、今の所もう一回頼む。」

修理は終わったらしく、俺の横から端末を覗き込むラントが声を発するのと、俺がその結論に至ったのはほぼ同時だった。「何故安定化出来なかったのか」一番可能性があったのは何よりも動力源・・・・ 太陽炉だった。

問題のシーンまで録画を巻き戻し、注目するのはドライヴの活動状況。

「ラントさん、新型・・・ すぐに完成させられますか?」

「セブンソードの修理はもうハロに任せられるところまでは済ませてあるし、新型自体も後は調整だけだ。

次の戦闘・・・・ は厳しいかもだが、その次には間に合わせる。」

今回の問題は俺達の想定通り太陽炉にあった。

セブンソードには太陽炉が両肩に一機ずつ、合計二機積まれているが、問題があったのは右の太陽炉だった。

〝明らかに出力が落ちている。〟それこそ粒子が収束出来ない程に。

・・・ 以前から兆候はあった。というかそもそも俺に原因がある。

この一年間で一回だけ、被弾したことがあった。その時被弾した場所が、右の太陽炉。基本的に永久機関として動く〝本物〟の太陽炉だったが、どうやらいよいよもって耐用限界らしい。

以前から兆候があったため、ＲＳの中でも『太陽炉の製作』が行われていた。勿論簡単な事ではなく、今までで作ることが出来た太陽炉は現在調整中の一機のみ。まさしく『メカニック班の血と涙の結晶』と表現出来るその太陽炉は、連合軍やザフト軍が生産する〝それ〟とは違って本物。

「任せます。俺にはそれしか出来ないので」

俺はこの機体のパイロットであって、メカニックではない。太陽炉の使い方は分かっても、作り方は分からない。

だから俺に出来る事は――――

「〝それ〟って何の事だ？」

首を傾げるラントに、俺は笑顔で応える。

「『もうちょっと丁寧に扱う』、次は無傷で帰りますよっ！」

それだけ伝えて、俺は彼らの作業を邪魔しない様、この場を後にした。

――

シロがドックに向かったのと同時刻――――――連合軍特別兵器開発局母艦・『テルミナ』ブリッジ内では、一人の女性の怒声が響いていた。

「あの無能上層部どもがッ！造って欲しいならそれなりの資源を提供するのが筋ってもんじゃねえのか!?」

先程まで通信していた相手――――連合軍総指揮官にあたる人物（達）に対し、感情を叩きつけるのはこの艦の艦長・・・ レシア＿クラシズ（Ｒｅｃｉａ＿Ｃｒａｃｉｚ）。

彼女は連合軍特別兵器開発局が持つ唯一の艦であるＵＳＷＤ―００２・Ｔｅｌｍｉｎａの艦長を務めていると同時、上局の局長でもある。

「艦長・・・ そろそろ落ち着きませんか？」

「そうっすよ。あいつらの無理難題に毎回キレてたら身が保たないっすよ？」

怒り心頭極まっているレシアに、おずおずと言った様子で声を掛けたのは、同艦のオペレータを務めるフィリス＿アウェント（Ｆｉｒｉｓ＿Ａｗｅｎｔ）。それに続いて軽口を叩いたのが、コルン＿ヴェニアス（Ｃｏｌｕｎ＿Ｖｅｎｉａｓ）だ。

コルンは同艦の砲撃手としてこの艦に搭乗しており、現在ブリッジにはこの三人しか居ない。

「・・・・ ふむ、コルンの言う通りだったな。少し落ち着いた。」

先程までの勢いを霧消させ、普段通りの落ち着いた様子に戻ったレシアを見た二人は、計った様に合わせて息を吐く。

そんな二人の様子を見たレシアは、苦笑を浮かべながらも今回の指

示について思考する。
「『ザフトの新兵装に対しての新兵装』・・・ ねぇ。うちでも手こずったのに、そんな簡単に言わないで欲しいって思わない？」
「うちはどうしましたっけ？」
　レシアの嘆きを含んだ質問に質問で返すコルン。
「シロは全て掠らせるに留めて避け切ってたよ・・・『トランザム』無しで。」
「相変わらず化け物で安心したわ。」
　どこか呆れたような声色で答えたフィリスと、吐き捨てるように納得を示したコルン。フィリスの言葉が示す通り、彼女らＲＳでさえザフト軍の新兵装の対策など出来ていない。
「『うちのパイロットみたいに避ければいいのでは～？』なんて言った暁にはシロと、ついでにセブンソードも押収されるだけだしねぇ・・・・。」
　レシアの呟きを最後に、ブリッジには静寂が訪れる。
　ＲＳは現在、〝セブンソード一機〟で全ての戦闘をこなし、更には勝利している。勿論小規模の戦闘であるし、降りかかる火の粉を払う程度のものだ。そこに軍事的な強さは存在せず、またあったとしてもそれは〝シロのパイロットとしての実力〟であると言えるだろう。それを分かっていない上層部は未だに『ガンダム』・・・ ひいては『太陽炉』のデータを寄越せと要求してくる。
「『それは出来ない』って何度も言ってるんだけどな。うちの存続に関わるし。
　・・・ 仕方ない、フィリス。メカニックの誰かと繋げてくれる？」
「分かりました」と短く答え、端末を操作しだすフィリスを確認し、レシアは一人考える。
「・・・ そろそろ、軍に降る事も考えないとなぁ。」
　でもそれはあの文言を――――。
　できればしたくない。だってそれは〝誰か〟の想いを踏み躙る事になるから。
　そう続いた思考を打ち切り、レシアは繋がった一人のメカニックと

対策を練り始めた。

ｓｔ．２　設計

俺がドックを出て、少しの時間が経った。少し、と言ったが正確な時間を把握してないだけで、本当に少しかは分からない。

…　先程のキャスターが話していた『軍備強化』、あたかも軍全体が行なっているかのような口振りだったがそれは違う。勿論『既存の機体等の生産』は行われているが、『新兵器の開発』は俺達ＲＳぐらいでしか行われていない。それは何故か――――絶対的に『技術者』が足りていないから。

――――

全ては二年前から始まった。

二年前、遂に本当の意味で宇宙へ進出した。完全自立型コロニー群…　後にプラントと呼ばれる国家が支配するコロニー群の建設に成功した。

当時の最新技術の結晶とも言えるコロニー群の建設成功に、当時の技術者達は湧き上がった。俺はその時学生をしていたから、先生達が浮き足立っていたのを覚えている。

プラント――――地球にとっての大規模生産基地を表すその言葉の通り、当初は好意的な貿易関係を築いていたという。地球上でしか得られない資源をプラントに提供し、プラントは有り余る生産力で得られた成果物を地球に提供する。

そうやっていつまででも暮らしていけば良かった。

それは、プラントが活動開始して半年弱程度経った時の事だった。

突如、両者の貿易関係は決裂した。

連合軍側では「プラントが過剰要求してきた」と言われているが、きっとそれはこちらも同じだったのだろうと俺は思う。

そして一コロニー群の名称に過ぎなかった〝プラント〟は、『国家』の名前に成り代わった。

未だ生産不可能な資源を求めるプラントと、生産可能資源の供給を求める地球上に存在する全ての国家――――地球連合との戦争が始まるのに、そこまで時間は要さなかった。

当初、〝戦争〟においては一歩も二歩も先を行く地球の国家達、その集合体である連合が次々と攻撃を仕掛けた。
元々国家が保持するコロニー等は存在して、それらの間でＭＳを使った戦闘を行っていたのが功を奏したのだろう。ＭＳ戦闘において、圧倒的な優位を保ち続けていた。
しかし、突如としてその優位は覆される事になる。
生産可能資源の大量生産設備、当時最新鋭の技術の結晶。そして…〝優秀な技術者はほぼ全員がプラントに呼ばれていた。〟
その三つが指し示す事、それは新兵器開発の容易さだった。次々と生産されていく高性能なＭＳ、そして連合側の技術者、開発者の不足により、戦局は次第に傾き出す。
このタイミングで発足されたのが、連合軍特別兵器開発局… その発足当初はＵＳＷＤと名乗っていた部隊だった。

――――

「おーい？シロー？聞こえてる～？
… さては聞こえてないな。」
想起にふけっていた俺を呼び戻したのは、誰かの声だった。
意識が現実に帰り切っておらず、誰が呼んでいるかは分からないが、早急に対処した方がいいだろう。
「聞こえ――――」
「レシアさん？はい、シロ見つけました。広場で寝てましたね」
「――てるからあの人を呼ぶのはやめろ。ついでに寝てもない！」
恐るべき早業と表現せざるを得ない速度で艦長に連絡しているのは、この艦のオペレータを務めるフィリスだった。
彼女は端末を操作しながら、こちらに笑顔を向けて続ける。
「嘘だよっ。今レシアさんはアルトさんと装備の設計してるから出られないし。」
「ふーん、そっかぁ。嘘つくんだー？」
「そっちだって寝てないって嘘ついたじゃん？」
「嘘じゃないし？」

テンポ良く会話の応酬が出来ると、心なしかいつもよりも嬉しい気がする。
というか・・・
「まぁいいや。それで、何か用があったんじゃないの？」
少なくとも俺に会いに来るほど彼女は暇では無いはず。・・・ 艦長を宥めるのには成功したのだろうか。
「うん。さっき言ったことって全部が全部嘘じゃなくて、設計の事でシロを呼びに来たの。」
設計の事・・・ というと・・・ あぁ、あれか。
「あの遠隔兵器の対策？」
「そう。また本部の人達が言ってきたんだけど、私達だってそんな対策兵器は持ってないじゃん？
だから今設計してるらしいんだけど、やっぱり実際に戦った人の意見が聞きたいらしいんだ。」
確かに、〝開発局〟である俺達の仕事は兵器の開発だ。それ自体に文句はないし、開発者自体が連合に少ない以上、依頼がうちに集まるのもいいとしよう。更に資源も碌に寄越さず依頼だけ偉そうに寄越す所も・・・ まぁいいとしよう。
ただ――――
「・・・ いや、これは俺が言うべき言葉でもないか。
分かった、直ぐに行くよ。」
思わず口をついて出そうになった〝作った人が言うべき言葉〟を飲み込み、俺は腰掛けていたソファを立って、艦長達が居るであろう部屋を目指して歩き始める。
「あ、待ってよ！私も行くからー！」
――――
テルミナ艦内：装備設計室・・・ という名目になっているただの一室。
現在そこでは、一組の男女が互いの意見をぶつけ合っていた。
「だーかーらー！あれを操縦者の技量抜きで防ぐならこれくらいは必須なんだって！」

「技量???そんなものまで考慮する余裕なんて今の私達には無いんだけど!?」
「そんな事言ったらシロの言う通り全部回避で事足りるだろッ！」
「はぁぁぁぁぁぁ!?こっちだって好きで設計してるわけじゃないんだけど!?
こんなシステム排除した方が安く仕上がる！あいつらに渡す装備なんて手抜きで――」
・・・ まぁ、こんな感じで。水平線上を延々となぞっていく議論が、今俺の前で展開されていた。両者の言い分が分かってしまう俺達としては、早急に妥協案の模索に手を付けて欲しいところではある。
「・・・ アルトさん、レシアさん。」
言い争いの中、やけに通りの良い声が俺の鼓膜を揺らす。その声の主・・・ フィリスは、とても優しい笑みを・・・ 一周回って恐怖すら感じさせる笑みを浮かべて更に続ける。
「シロを呼んだ理由、聞かせて貰っていいですか？
というかいつまで意味のない論争を続けるつもりですか？」
彼女はそう語りながら、淡々と二人との距離を詰めていく。その動作と、表情全てが作り笑いだと訴えてくる笑みが原因なのだろうか。先程までこの場を支配していた喧騒は既に見る影もなく。
「私は技術者とはお世辞にも言えないので、お二人の心境は分かりません。ですが・・・ ”妥協”を覚えてください。話が進みません。」
「「・・・・・ はい」」
フィリスの説得（？）により、一時の静寂を取り戻した部屋の中で、ここまで置いてけぼりだった俺は話を切り出す。
「それで、結局何の用だったんですか？」
俺はその部屋の机や椅子、床に散らばった設計図らしき紙面を眺めつつ、すっかり静かになってしまった二人に問いかける。
「・・・ フィリスはその場に居たから知ってるけど、また連合本部がうるさくてね。」
俺の質問に答えたのは、この艦の艦長を務めているレシアさん。彼女は溜息を吐くとともに、更に続ける。

「ちょっと前に、またザフトが新兵器を搭載していた事があったでしょ？どうやらそれが本隊の戦闘で猛威を振るってるらしいんだ。」
「その兵器を無力化できる装備を本部はご所望なんだ。」
　レシアさんに続けるように補足を加えてくれたのは、連合軍特別兵器開発局が抱える数少ないメカニックの一人で、主に設計の構想を担当している人・・・アルトさんだ。
　彼らが揃って問題に挙げている”ザフトの新兵器”というのは、十中八九俺が”遠隔兵器”と呼称している兵装の事だろう。もっと分かりやすく呼称するのであれば、有線接続式攻撃用ポッド、といった所だろうか。対ＭＳ戦において、いくら線が繋がっているとはいえ、その場で背後等のカメラに映らない死角からの攻撃を可能とする、というのは、ただのパイロットに過ぎない俺から見ても非常に優秀な装備だと思う。
「なまじシロ・・・向こうの言い方をすれば”二個付き”が生還を果たしてるせいで、対策があるんだろう、って決め付けられてるんだったか？」
「そ。これもフィリスには話したけど、”シロは実力で回避してる”なんて馬鹿正直に申告した暁には、シロとガンダムが本部に徴収されて終わり。」
　実際に相対してみた感想としても、特段難しいわけでもない気がする。勿論、初めて使われた時は驚いたけど。ザフトの技術力は留まる所を知らないなぁって。
「そこで、本部には実験台になってもらおうとレシアが思いついたらしくてな。適当な装備の設計図を描いて、本部に送りつける事にしたらしい。」
・・・連合軍特別”兵器開発局”の名前が泣くような言葉がメカニックから飛び出してきた。それでいいのだろうか・・・。
「そこでアルトを呼んで、描いてもらおうと思ったんだけど・・・」
　レシアさんが言葉尻を濁すと同時、彼女とアルトさんは息を合わせたかのように同時に机を叩いた。
「「こいつがいつまで経っても人の話を聞かないから・・・ッ！」」

そしてそのまま互いを指差し、両方とも自身の意見を主張し始める。
「いいか!?あれを無効化するためにはこれだけの装備案があって――」
アルトさんは床に散らばっていた紙を一枚拾い上げ、レシアさんに見せ付けるようにする。しかし肝心のレシアさんは、そんな紙など見飽きたと言わんばかりにそれをはたき落とす。
「だから！全部！資材が足りないって言んの！伝わるかな!?」
「要求に答える最低限の資材くらい本部に申請しろよッ！」
「したわよ！でも棄却されたわ「ＵＳＷＤに流す資材は無い」ってっ！不足分の資材はどこから出るか知ってる？うちの部隊の負担になるの！だからなるべく安く抑えろって――」
「足りねーよ馬鹿か!?この資材の量で何を作らせる気だよおもちゃか!?――」
・・・　など。途中で聞くのもしんどくなってきた二人の会話から意識を放し、俺は自分が呼ばれた理由を確認する。
「少しくらいっ、譲歩をっ、知ってくださいッ！」
ちなみにフィリスは再度止めに入るらしい。頑張ってね。
さて、俺が呼ばれた理由だが、まぁ意見番と言ったところだろう。この艦で唯一、俺はあの兵器と戦った経験を持っていて、更にはほぼ無傷で帰還も果たしている。そんな俺の言葉は、この場においては何よりも説得力のある言葉になっているのだろうとも思う。
自身の呼ばれた理由の推察も済んだところで、再度口論の方に意識を向けるが――まだ駄目だね。フィリスが落ち着かせる事に成功していない。・・・　お二方、大人になってまで何してるんですか、という子どもながらの純粋な疑問は放っておくとして。俺は机に散らばった無数の設計図の中に、何枚かの白紙の紙を見つける。俺はその紙の表面は勿論、裏面にも何も書かれていないことを確認し、ついでに落ちてたペンも手に取って再度考えを纏める。
俺が意見番であるのであれば、おのずと聞かれるであろう事は浮かび上がってくる。後はそれを、出来るだけ文字に起こすだけだ。

暫く・・・ と言っても三分、五分程度だろうか、ペンを走らせていたところで口論に勤しむ二人に変化が生まれた。
「よし、この条件なら問題ない。」
「了解。直ちに設計を始める。」
なんだろうこの煮え切らない感じ。先程まで子どものように乱雑に自身の意見をぶつけていた二人が、急にプロになった感が溢れているというか・・・。というかよく相互理解の領域まで持っていけましたね。
「はぁ・・・ やっと着手してくれた・・・ って、シロは何してるの？」
少し奥で口論していた二人を止め、作業の着手までやらせる事に成功したフィリスは、若干の疲労を表情に映しながら俺の下に戻ってくる。そしてそのまま俺がペンを走らせている紙を覗き込んできた。
「・・・ これ、質問の答え？」
「そう。フィリスが宥めてる間に書き進めてた。」

勿論全ての質問を網羅してるとは言えないので、ここから帰る・・・とかはないのだが。単純に紙面に起こしておいた方が見やすいかな、と思ったからだ。紙とペン転がってたし、暇だったし。
「ねぇこれさ、パイロットの事しか書かれてないけど、大丈夫？」
俺は意図的に彼女の質問を無視して、ペンを走らせる速度を上げる。そしてそのまま全てを書き終えて、その紙をフィリスに受け渡す。
「フィリスさ、コンバットレコーダの映像も今映せるよな？それとあわせて、フィリス自身の見解を説明してきてほしいんだ。」
ここまでの行いを振り返るに、フィリスに説明を丸投げしたのは面倒くさかったから、と思われること間違いないだろうが、別にそれだけが理由ではない。
フィリスはこの艦の戦況オペレータ・・・ 俺の戦闘中のオペレーションを主に担当している。つまり、俺の遠隔兵器の回避方法を客観的に見ていたと考えられる。主観的な話は全てあの紙に記した、後はオペレータである彼女の仕事だ。

「… おっけー。」
彼女が純粋に優しいからか、それとも俺の考えを読みきったからかは分からないが、若干の思考時間の後に快諾してくれた。彼女は貰った紙の内容を一瞥後、理解を表す頷きをした後、二人の元へ歩いていく。
「レシアさん、アルトさん、シロが見解を書いてくれました。邪魔かも知れませんが… 私の考えも合わせて、聞いていただけますか?」
後は全てフィリスに任せて大丈夫だと思う。俺が伝えるべき事は伝えたと思うし、何か新しい質問が出てきた時の為にこの部屋にはいるけどね。
――――

ｓｔ．３　要請

俺が所感を示した紙を渡してから、数十分が経過した。俺は俺で考える事があった為、向こうの進捗そっちのけで考え事していたのだが、どうやら上手く纏まったらしく。

「……うん。これなら文句言われることはないかな」

「よし。こっちの基準もクリアだ。運用難度も大きく下がっているしな」

「……そう、ですかっ。それは、良かったです……」

笑顔で言葉を交わす二人――――レシアさんとアルトさんとは対象的に、疲れをその表情に浮かべるフィリスを見るに、恐らく彼女が折衷案を考え、図面に起こしたのだろう事が予想出来る。

彼女は今でこそ、戦況オペレータとしてテルミナのブリッジに従事しているが、元は研究者としての側面が強かった。そもそもこうして軍にいるのも――――

「シロ、ありがと。凄い参考になったよ」

「ん、あぁ。それは良かったが……お前は大丈夫なのか？」

先ほどまで、息も絶え絶えに限界感溢れていた彼女だが、いつの間に持ち直したのか、今では普段通りの振る舞いを見せている。

「まぁ、久しぶりだった事もあって、ちょっと疲れちゃっただけだから。落ち着けばすぐに治ったって所かな」

そう語るフィリスは、一枚のタブレットを操作してこちらに示してくる。

「それはそうと、ラントさんから聞いたけど、太陽炉の調子が悪いって本当？」

「あぁ。結構前に被弾した右肩の太陽炉の調子が悪い。これまでは騙し騙し使っていた部分もあったけど、ラントさん開発の武器運用に問題が生じた」

目に見えるレベルでの不調が明らかになったのは今回が初だ。一応ＧＮコンデンサーの併設は行っている為、万が一が起こっても即座にピンチになることはないが……不味い状況なのは変わらないだろ

う。
「うーん…太陽炉の開発はそろそろ終わるんだよね？」
「らしい。だからまぁ、問題ないと思うが――――」
――――『緊急連絡。ブリッジクルーは至急、ブリッジに集まってください。クルーは至急、ブリッジに集まってください。』
俺と彼女が右肩の太陽炉について話していると、艦内に放送が響き渡る。
「レシアさん！」
「分かってる。シロも来るか？」
「……まぁ、コックピットで待機って言われてないんで、息ますけど」
ラントさんと話していたレシアさん―艦長を呼びつけたフィリスは、一瞬こちらを見つめて艦長に指示を仰ぐ。艦長はかの放送に対して若干嫌そうな顔を浮かべながらも、一応は聞きにいくつもりらしく。
「ラント、後は任せる。適当に仕上げてくれればいいから」
「任せとけ。なんならシロ用に直接チューニングした案も書いといてやるよ」
そんな会話を交わした後、若干急ぐように会議室を後にしたのだった。
――――
「戻りました！」
「戻ったぞ！」
フィリスと艦長、二人がそれぞれ言葉を発しながらブリッジに入ると、彼女ら以外のクルーがそれを出迎える。
「お疲れ様です、艦長」
「それで？」
「はい。要請を送ってきた相手は、連合軍第一指揮隊―指揮隊長―アズサ―レードリッヒ（Ａｚｕｓａ―ＲａｉｄＬｉｃｈ）です。」
その名前が出た瞬間、ブリッジの空気が凍り付いた。
「「「第一指揮隊長!!!!!」」」
しかし、あくまでも驚いたのはブリッジクルーだけらしく、肝心の

艦長―レシアさんは笑いを堪える様に口元を抑えている。
「……ふふっ、アズサか。いいよ、続けて？」
「えっ、はい。どうも、応援要請みたいです。」
若干の動揺も見せながらも、艦長に従って続きを伝えるクルーの一人の言葉に、俺も違和感を覚える。
現状、地球連合軍は”指揮隊”という概念を元に軍を動かしている。そして、第一指揮隊と言えば本隊……連合軍の最高戦力である。そんな所の指揮隊長が、指揮隊にすら属していないうちに応援要請……？
「どうも、現在近くに居る部隊がうちしかいないらしく……」
「私宛てに暗号文添付されてない？それを表示して」
「暗号文ですか……あ、これですかね」
クルーの一人が機器を操作し、ブリッジのモニターに拡大表示させる。だが、暗号文という事もあり、俺には意味が通っている文章には思えなかった。
「……なるほどね。よく分かったわ」
「え？分かったんですか？見るだけで？」
「まぁね。簡単に内容を示すけど――まず、現在彼女は本隊と一緒に居る訳じゃないって事。これによると、新型強襲艦、アーサリアの運用テスト中だったらしいわね」
「なるほど」
「それで、応援要請の理由だけど。ここから少し離れた宙域にて、敵補給艦を補足、護衛も見当たらない絶好の奇襲チャンスらしいわ。ただ、運用テスト中のアーサリア級にはＭＳの配備数が少ないのと、仮に向こうの応援が間に合った場合、こちらの戦力では不安が残るとの事。近くを調べてみても、私達しかいなかったみたいだから、私達に送ってきたみたいね」
まぁ……筋は通ってる、か？
「受けるわ、この要請。艦長命令よ」
艦長はそう宣言すると、手元の端末を操作して通信を繋げる。この流れから察するに、恐らく相手は――

「久しぶりーっ！元気にしてたー!?」
「そっちこそ、元気にしてるみたいで何よりだわ――アズサ」
「あれ？連絡してくるって事は……」
「えぇ。受けるわ、その要請。代わりに、報酬の方は忘れない事ね」
相手は、艦長の言葉が正しければ、第一指揮隊長であるアズサ―レードリッヒその人だった。
予想外だったのは、まるで友達と話すかの様に言葉を交わす、二人の関係性といった所だろうか。
音声のみの通信な為、声しか聞こえてはいないが、恐らく画面の向こうでは笑顔で話しているであろう事が伝わってくる。
「……あのさ、もしかしてレシアさ。」
「何？」
「ブリッジで話してる？」
「勿論」
「……」
「これが、お堅い印象を持たれてる第一指揮隊長様の本当の姿よ。」
「……お見苦しい所をお見せいたしました。私はアズサ―レードリッヒ、第一指揮隊の指揮隊長を務めています。今回は要請に応じていただき、誠にありがとうございます」
急に畏まった様子を見せる画面の奥の隊長様に、艦長は笑いを零しながら補足する。
「暗号文の内容は全て伝えたわ。それで、どうするの？」
「……そうですね、こちらとしては上層部でも話題になってる『二個付き』の力を借りられればそれでいいんですけど」
「だってさ。どうする、シロ？」
突如話を振られ、思わず無言になってしまう。
……補給艦の奇襲か。恐らく戦闘になることはないだろうし、機体に掛かる負荷も軽度で済むだろう。
「艦長がよければ、大丈夫です」
いろいろ他に考える事はあったものの、俺は了承の意を示す。
ちらっとしか聞こえていないものの、恐らく報酬が出るだろうし。

特に理由もなければ受けておくのがいいだろう。
「じゃあ、テルミナは適当な宙域に待機。敵が近くにきても見逃して、私達に報告すること。したらすぐ戻ってくるから」
〝私達〟？艦長が放つ言葉に、俺は首を傾げる。
「何不思議そうな顔してんの、私も行くわよ？」
「え？何で行くつもりですか？」
「何って……普通に貴方の機体でだけど」
「いや無理ですって。あれ一人用ですし」
「……じゃあ、シロが縮んで？」
「普通に輸送機かなんか使えばいいじゃないですか！」
「まぁ何でも良いわ。とりあえずそういうことだから。後はそっちで話すわね」
「――分かりました。お待ちしております」
そうして通信が切れる。俺にとっての〝とりあえず〟は、人の機体に乗る気満々な彼女を説得する所からだろうか。

――

前略。現在俺は、視界の半分以上が覆われた状態で、感覚と音声サポートを頼りに機体を操縦していた。
「ほらね。私だって太ってるわけじゃないんだし、コクピットくらい余裕って話なのよ」
「いや余裕ではないですけど、ね」
「あ、目の前に中規模のデブリ。避けてね」
別に見なくてもある程度は操作できますけどね。
俺は彼女の指示に従う形で機体を旋回させ、サイドモニターに彼女が言及したであろうデブリを確認して、スラスターを吹かせ直す。
――皆まで言うな。あぁ、説得には失敗した。
しかも、謎に突っかかったフィリスの助けもあってなお、レシアさんを止める事は出来なかったのだ。その敗戦の影響もあり、俺の視界は現在、彼女の背中でその殆どが閉ざされている。
「そもそも、レシアさんが赴く必要はあったんですか？」
「勿論。何せ今回の作戦指揮を執るのは私だからね。向こうの人間に

挨拶した方がいいでしょ」
彼女の言葉の通り、今回の作戦指揮を執るのは”何故か”レシアさんだ。第一指揮隊長というトップクラスの逸材がいる中、敢えて兵器開発局の局長を使う理由を聞いてみたが……
――――『レシアは元々、第一指揮隊で指揮を執ってた人間ですよ』
というアズサさんの一言で、何人かの乗務員が驚いたのは想像に難くない。一部の人間は知っていたみたいだけど。
「お、そうこうしてると、アーサリアからの着艦指示だね。表示するよ」
「……はい。よろしくお願いします」
聞いた話では、機体を誘導線に乗せれば後は勝手に着艦までやってくれるらしいので、レシアさんの背中越しではあるが、誘導線を確認して機体を操作する。
「こうやって見てると、私でも操縦できそうだけどね。これがあの戦闘に発展するんだから、ＭＳ乗りの技術はよく分からないわ」
「まぁ、今は移動だけですから。っと、見えないんですけど、誘導線乗ってます？」
「乗ってるよ。お疲れ様。わがまま聞いてもらっちゃって、ありがとうね」
彼女の言葉を聞いた俺は、見えない手元のコンソール類から手を離す。……ふぅ、とりあえず、彼女を乗せた状態で戦う羽目にならなくて本当に良かった。流石にスーツも着ていない彼女を伴っての戦闘は無理があったからな。とりあえず、アーサリア？とやらに下ろせそうで何よりだ。
「あ、シロは休んでてもいいよ。私はすぐ降りるから」
「了解です」
モニターの端々に、アーサリア級のものだと思われる装甲が見える。そして、何かに着地した様な衝撃――――無事に着艦できたか。
「じゃ、行ってくるね」
そういうと彼女は、勝手にコクピットを開いて下に降りていく。
少しだけ聞こえる喧噪は、恐らく『二個付き』から彼女が出てきた

事に対してだろう。

――――暫く収まらないだろうし、俺はここで待っておくとしようか。

――――